

令和4年度 第3回四国森林管理局国有林材供給調整検討委員会【議事概要】

1 日時及び場所

令和4年12月21日（水）10時00分～11時30分

四国森林管理局 3階会議室（ウェブ開催）

2 議事概要

【委員会の検討結果】

国産材の製材品は、スギ・ヒノキともに相場の下落が見られたものの、ヒノキ製品の荷動きも回復するなど、現在は安定傾向が見られる。そのような中、原木市場でも銘柄によっては丸太の引き合いが良くなっており、ヒノキの荷余り感も解消されつつあるなど荷動きは回復傾向、丸太価格もやや落ち着きつつある。

このため、国有林材の供給調整を行う必要はなく、民有林材の出材状況、外材製品の状況等に注視しつつ、引き続き需給動向を見極めていくことが重要である。

【主な意見等】

○ 素材生産業

- ・ 11月末に行った木材生産にかかる調査では、約6割の事業者が間伐事業を主体としている。このため生産量の高い皆伐が伸びず昨年度並みの生産量に留まっていると推測する。
- ・ ヒノキについては、引き合いは依然として弱い状況が続くが、スギについては、3m材の動きは順調。直送材についても動きに変化はない。
- ・ 素材生産現場では、作業は順調に進んでいるものの製品流通が停滞気味にあることから原木のダブつき感が見られスムーズな原木搬送ができていない。このため山元でのストック調整を強いられているが貯材スペースに限界があり、生産を伴わない作業（切り捨て間伐等）へのシフト等で調整している。

○ 原木市場・共販所

- ・ 入荷量については時期がよくなったこともあり増加傾向。スギ4m材15cm～22cm材は不足気味。価格は、スギについては横ばい。ヒノキについては相変わらず在庫過多状態が続いており、3m材を中心に値下がり傾向にある。
- ・ ヒノキの価格低下によるスギの増加や、製材所の在庫調整の影響から、品薄のヒノキ良材の仕入れが増加しており、ヒノキ元玉良材については調子が良い。今後は雪等の影響も出てくると予想されるが、先行きには警戒感が強く荷動きが活発になること

は難しいのではないか。

スギに関しては、値下がり傾向で推移しているが、製品の動きが悪いものの合板やバイオマス等の消費があるので一定のところでは落ち着くように思う。

- ・ 単価がコロナ禍前よりは良いことや今までの未引き取り材が解消されつつあること、虫害等による荷傷み懸念が無くなったことで、スギについては今までどおり荷動き良好。ヒノキについても、若干荷動き回復傾向にある。

○ 製材工場等

- ・ スギは安定供給が出来ているものの、特に4 m材14~16cm、18~22cmの原木が不足気味である。また、重油代や電気代の高騰により製造コストが増加していることや在庫量が増加し、減産している工場も一部見受けられる。
- ・ 原木在庫が増えている状況であるが、それが製材に捌けていない。製材品についても県外取引の悪化によってその製品が県内市場に積まれている状況。取引も低調で価格は下落傾向にある。住宅資材の高騰が住宅価格を押し上げ、先行き不安から買い控えが起こっていることが影響している。
- ・ 建築現場では、労働人口の減少、高齢化が著しく、大変な状況になっている。建築工法の簡素化と木材流通のマッチングが必要になると思う。
- ・ 原木の入荷は順調、価格についてもウッドショック以降値下がりが続いていたが現在は安定している。ヒノキについても夏頃の荷余り感は少なくなった。

製品については、秋口の在庫調整局面が終わり、製品の先安観が弱まったことから、ヒノキ製品の荷動きは回復してきた。価格が今の水準であれば輸入材よりも割安感があるので、これ以上の値下がりはないと考える。

- ・ 天候も良く順調に入荷しているが、スギは外材の代わり（価格が安い為）で引き合いがあり、高上がりしている。

製品出荷は、11月は昨年と同程度、売上金額も昨年以上となった。先行き住宅の見通しが少し悪そうなので年明けの荷動きが心配される。また、電気料金の値上げや運送の2024年問題も懸念される。